Project Proposal 企画書
～「Schneider」製造再開依頼～

2018年10月18日

想いが溢れて まとまらない トモコ43歳

Project Summary 企画概要

私は幼い頃から、靴が脱げそうな不安があり、靴の中で「足が泳ぐ」苦痛があった。歩かずに暮らしたいと思ったが、歩くことは健康に重要であり、快適に過ごせる靴を探した。

靴（靴屋）を探し続けていると、素晴らしいシューフィッターとシュナイダーシューズに出会い、「足の泳ぎ」に邪魔されない人生が開けた。機能美、装飾美を兼ね備えたその靴を愛用し続けてきたが、最初に購入したデザインが製造中止と聞いた。

この度、シュナイダーシューズのカラーオーダー会が開催されると聞き、直接このデザインの製造再開をお願いしたいと考えた。この書面は、私の靴探しの旅路を綴りながら、このデザインの製造再開を依頼し、カラーオーダー会の成功を願うものである。

1　背景　足は泳ぐものだと思っていた私

私は、幼い頃から靴の中で足が泳いでいた。それは、両親が子供の成長を期待し、大きめサイズの靴を買っていた影響もあり、「泳ぎ方、泳ぎ具合」が変化することはあった。小学生の頃、友達から誘われバスケット部に入部した。紐で結ぶバスケットシューズを履くと、不快感から少し開放され、紐靴が好きになった。

高校時代、学則で「黒色の靴」と決まっており、タッセル付き、飾り紐つきローファーなど数種類から選ぶことができた。しっかりと紐で調節する靴はなく、履き比べて、プレーンなローファーで妥協した。私は、靴を履かない水泳、プールが魅力的と感じる一方で、泳ぎは苦手なままだった。

当時、スノーブーツ、スキーブーツは靴下の厚さでサイズ調節し、同時に防寒、保護するのが主流だった。スキーを教わるなかで、足にフィットするブーツによって、適切にスキー板と雪面に力が伝わり、自分自身の上達も実感するでしょうと説明された。靴を選ばないスキーが楽しいと感じて５年ほど続けていたが、結局、靴が大事なのかと落胆した。

就職後の身だしなみ教育で「華美でない靴」と指導され、履き心地も満足する靴は、見つからなかった。先輩にゴルフ、ボーリング、マラソン大会など誘われることがあったが、快適に過ごせる靴が無く、気乗りしなかった。靴を選ばないイベントは何だろうと考えることが多々あった。